

## 問題【国語】

次の慣用句の意味を答えましょう。

- (1) 手塩に掛ける
- (2) 青菜に塩
- (3) 敵に塩を送る

## 豆知識 雑学コラム

### 塩味効いた？ 慣用句

今日は塩に関わる慣用句を見ていきましょう。日本人と塩の関わりはとても古く、縄文時代には塩を作っていたとも言われています。そのため、日本語にもいろいろな塩に関係する言葉があります。では、みていきましょう。

最初は、「手塩に掛ける」です。「牛を手塩に掛けて育てる」などと使われることがありますよね。手塩とは、もともと、食事の時に味を自分好みにするために添えられた塩のことです。そこから「手塩に掛ける」は「自分の好みに味付けすること」転じて「自分の理想通りになるように大切に育てること」という意味になりました。

次に「青菜に塩」です。「青菜」はホウレンソウや小松菜のことで、「青菜」に「塩」をかけると水分が出ていって、萎しおれてしまいます。この様子から、「元気をなくしてうなだれている様子」を「青菜に塩」と呼びます。

最後に「敵に塩を送る」は戦国時代の武田信玄と上杉謙信の逸話が基になっています。もともと武田信玄の領地には海がなく、信玄は塩を隣接する今川家から手に入れていました。しかし、信玄と今川の仲が悪くなると、塩を手に入れられなくなりました。その時に、信玄のライバルである上杉謙信から塩を送ってもらい、助けてもらったという話です。この話から「敵に塩を送る」とは「敵が弱っているときに助ける」という意味で使われるようになりました。

さて、信玄が塩を手に入れられなくて困ったという話でも分かるように、塩は貴重なものでした。日本以外でも古代ローマでは、兵士に給料として、お金ではなく塩を渡していたと言われていました。現代では、塩は食べ物に多く含まれていて、逆に「塩分控えめ」や「減塩」といった言葉を目にしないう日はなくなってきました。こうして塩のことだけ考えてみても昔の人より現代の方が豊かな生活をしていると実感できますね。

## 【解答】

- (1) 大切に育てること
- (2) 元気をなくしてうなだれている様子
- (3) 敵が弱っているときに助けること